

創作詩 好きな歌人からイン
スピレーションを受けて



小泉友美 KOIZUMI T



目次

和泉式部 柳原白蓮 一休宗純の歌からインスピレーションを受けて	1
---	---

和泉式部 柳原白蓮 一休宗純の歌からインスピレーションを受けて

個人的に好きな歌人の歌から、インスピレーションを受けて、創作した詩を数首ここに紹介したいと思います。

和泉式部 (978 - 不明)

一休宗純 (1394-1481)

柳原白蓮 (1885-1967)

和泉式部の作品の中で、一番好きな歌です。明るさを失った時に、ふと自分の内にある暗い澱みに触れて、そして、考えさせられました。

「暗きより 暗き道にぞ入りぬべき
遥かに照らせ 山の端の月」(和泉式部)

「目開かざらば
手をたずさえて
くらき道ゆき
くらきてくらき
道まよいけり
いずこに神は
おわりにけり」(友美)

一休宗純 (一休禪師) のこの詩にふれましたのは、川端康成が影響を受けた詩ということで、個人的に関心を持ちましたが、何故魔界に入り難いのか、理解出来ませんでした。その疑惑から生まれた詩です。

「仏界入り易く

魔界入り難し」(一休禅師)

この魔界に、はたして私は入れるのでしょうか？

「魔にとらわれし
仏にとらわれし
魂あくがれて
生きるか死ぬか
われはいずくに
ましますや」(友美)

次の生死についての一休禅師の話は、破戒僧と知れた一休のダイナミックな人格を、よく表現しています。一休にとっての死の道は、ひとりきりということですが、私は死とは、ふたり、ふたりきり、ふたつの道と思います。

「世の中の生死の道に
連れはなし
ただ寂しくも
独死独来」(一休宗純)

ふたつにしてひとつ

「生き死にも
顕き幽も
ともに往かん
ただよろこびも
ただかなしみも
うまれかわりて
ただ往かん」(友美)

柳原白蓮のよむ歌は、華やかで女性の業を感じます。美しい語彙のなかに、しなやかながら折れにくい芯のつよさを感じます。しかし、驚かされますことに、執念の毒の炎が大胆に表現されていることです。

「君ゆえに死も怖るまじかくいるは
魔性の人か神の言葉か」(白蓮)

魔性も聖性も、時には表と裏、同じものなのではないでしょうか？

「魔物あり
魍魎魍魎
彷徨いて
魔も神仏
救いはいずこ
顕と幽世」(友美)

次の柳原白蓮の歌は、日本のカトリック信者の殉教者がその昔、背教を強いられた時に、踏み絵を使い、信仰を試されました。実に、おそろしい詩です。

「踏み絵もてためさる日の来しごと
歌反故といだき火の前」(白蓮)

踏み絵を前にためらう足と、その重みによって版が壊されてゆく、哀しみの音が聞こえるようです。

「ためされて
踏み碎きて
燃えゆくは
果てのみえない
十字架
踏み碎き
踏み碎き
その祈りあり」(友美)

はたして、この顕世に本当に生きているのかわからなくなり、胸がつまるような気になりことがあります。

この白蓮の詩を読み、呆然としました。

「ゆくにあらず
帰るにあらず
居るにあらず
生けるかこの身
死せるかこの身」(白蓮)

死とは、隠れ世にあらず、この顕世にこそあるものでしょうか？

「生きもせず
死にもせず
この顕世に
こころ惜しまず
影を踏みゆく」(友美)

次に紹介する歌は、2024 年から現在にかけて、思いつくままに作った歌です。

「十字架
その腕 脚に
接吻し
深まりゆくは
いのち (または、いのち) なりけり」

「 燃えあがり
焦がされしまま
その胸に
紅蓮の華よ
顕世の夢」

「ちちとこの ゆめもうつつも
ともにさく花」

「まどろんで まどろみぬ ゆめのまた夢」

「春の岸 零ちしも昇る ダンテの夢」

「流されし ひるこはえびす 福のかみ」

「顕世の目には 見えざるおもかげに」(天の原、ふりさけ見れば霞立つ、露路惑いて、
行方知らずも)

「月の海 (Mare Foecunditatis)

四魂ぬぎすて

醒めとほけ」

「顕幽も

すべてはこころ

こころなり」

「何一つ

音とてなくて

なにも無し」

「滝垢離に

その歩おどりし

力充つ」

「記ることは

識ることあらず

臆もせず」(記憶について)

「花合歓に

行きつ戻りし

記憶かな」

「むなしさの

塵よりうまれ
すべて空し」

「1つより
2つにあって
神語る」

「眠りおち
夢まぼろしに
耳ひらく」

完

フランス アンジェ 2025 年 7 月 3 日

創作詩 好きな歌人からインスピレーションを受けて

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
